

令和6年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和6年4月18日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

2 調査の概要

箱根町では、4校77人の児童生徒が参加

（内訳：町立小学校3校6年生43人 町立中学校1校3年生34人）

3 調査内容

（1）教科に関する調査（国語、算数・数学）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等

※調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。

（2）生活習慣や学習環境等に関する質問調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 （例）学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的な生活習慣、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 （例）授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

4 調査時間

小学校（児童質問調査は、各学校の状況に応じて、調査時間を設定して実施。）

1時限目	2時限目	
国語(45分)	算数(45分)	児童質問調査(20分程度)※

中学校（生徒質問調査は、学校の状況に応じて、調査時間を設定して実施。）

1時限目	2時限目	
国語(50分)	数学(50分)	生徒質問調査(20分程度)※

※児童生徒質問調査は、原則全ての児童生徒を対象に、オンライン方式により実施。
ネットワーク環境を考慮して日程分散を行う関係上、必ずしも教科調査と同じ日にならないこともある。

5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

◆小学校【国語】

「知識・技能」を測る問題では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関して、漢字を文や文章の中で正しく書くことに引き続き課題が見られた。「箱根ミニマム」の取組の一環として、日頃から漢字を正しく用いる態度と習慣を養うことができるよう指導することが大切である。

「思考・判断・表現力」を測る設問、特に記述式の問題で平均正答率が低くなる傾向は変わらなかったが、無回答率は高くはなく、取り組もうとする姿勢に改善傾向が見られる。

「読むこと」では、登場人物の相互関係や心情を描写を基に捉え、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりして、心に残ったところと理由をまとめることは平均正答率が7割を超えており、できていた。

「話すこと・聞くこと」では、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することや、目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することに課題が見られた。引用の理解が不十分であることや事実と感想・意見を区別していないことが誤答からうかがえた。

「書くこと」では、目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることはできていたが、目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに引き続き課題が見られた。伝えたいことを明確にし、客観的な事実を取り上げることで考えをより深めていくことができるようにする指導の充実が大切である。

◆小学校【算数】

「数と計算」では、加法と減法について問題場面の数量関係を捉えて式に表すことが比較的できていたが、除数が小数である場合の除法の計算に課題が見られた。

「図形」では、直方体の見取図の見方や立方体の体積の求め方については全国平均に近い正答率であったが、円の直径の長さ・円周の長さ・円周率の関係については理解が不十分であり、円周の長さを直径の長さの2倍と捉えている誤答が多かった。

「変化と関係」では、3問すべてにおいて全国平均を下回るか、正答率そのものが低い結果となっており、記述に不足があるか誤って書いている誤答、単純に2区間の分速を足して全区間の速さを求めているなどの誤答の割合が多かった。速さなど単位量当たりの大きさの意味や表し方を理解するとともに、場面や目的に応じて比べ方を考察する方法を工夫し、日常の事象の解決に活用できるよう指導していくことが大切である。

「データの活用」では、簡単な二次元表を読み取り、必要なデータを取り出して落ちや重なりのないように分類整理することができていた。反面、円グラフの目盛を正しく捉えること、折れ線グラフや表から必要な数値を読み取り、条件や情報を解釈して、表現したり判断したりすることには課題が見られた。

問題形式別では、記述式についての正答率が低い傾向が続いており、本年度も全国平均を下回る正答率であった。問題解決の過程や結果を図、数、式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動を、学年や児童の実態に応じて計画的に取り入れていく必要がある。

◆中学校【国語】

「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」の領域別では、「読むこと」の平均正答率が最も低い傾向は変わらず、前年度より低下した。また、設問の複数の条件に合わせた内容を書く問題では、示された条件を踏まえていないなどの誤答が引き続き多く見受けられる。

葉の形について書かれた説明的な文章に関する問題では、具体と抽象など情報と情報との関係について理解はできていたが、文章と図を関連付けて考える問題や目的に応じて必要な情報に着目して要約する問題の正答率は、全国平均を下回った。本文の内容を正確に捉えて読むことや、解釈、要約した内容と本文の内容と齟齬がないが見直すことができていないものと考えられる。

「話すこと・聞くこと」では、必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることはできていたが、話合いの話題や他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることに課題が見られた。

「書くこと」では、紙の辞書を語り部とする物語の結末を想像して記述し、表現上の工夫とその効果も説明する問題で、自分が工夫した表現について、どのような効果があるのかを書くことができていないなど、目的に応じた内容になっていない誤答が多く見られる。自分が表現した内容を確認し、目的に照らし合わせて改善できるように指導することが大切である。

短歌に関する問題では、表現の技法についての理解や描写を基に内容を捉えること、行書の特徴の理解について平均正答率が低かった。

例年、文脈に即して漢字を正しく書くことに課題が見られるので、引き続き漢字を正しく用いる態度と習慣を養うことができるよう指導することも大切である。

◆中学校【数学】

どの領域も昨年度と比較して正答率が上昇した。特に「データの活用」領域では、全国平均との差が縮まり大幅な改善が見られた。

「数と式」では、正三角形の図を基にした、正の数と負の数の加法の計算がよくできていた。また、「データの活用」では、与えられたデータから最頻値を求めることができていた。

「関数」では、二つのグラフにおける y 軸との交点について解釈すること、グラフの傾きの意味を事象に即して解決することが比較的できていた。

反面、全国と比較して、特に課題と捉えられる設問が 5 問あった。うち 3 問は「知識・技能」を測る設問で、文字を用いた式で表したり等式を目的に応じて変形したりする力、複数の集団のデータ分布から四分位範囲を比較する力に課題が見られた。基本的な文字式の意味理解など、基礎基本から丁寧に取り組むことが大切である。

他の 2 問は「思考・判断・表現」を測る設問であった。正四面体の図を基にした整数の和の設問では、成り立つと予想される事柄について数学的に説明する力、三角形の合同を基にして証明する設問では、根拠を記述しながら筋道を立てて説明する力に課題が見られた。問題解決する場面を設定し、思考の過程を的確に表現したり、考えたことを数学的な表現を用いて説明したりする活動を大切にして指導していくことが必要である。

(2) 児童生徒に対する質問調査（オンライン方式）結果の分析内容について

【小学生の質問回答より】

- 「自分には、よいところがある」、「先生は、よいところを認めてくれる」、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」の項目とともに肯定的な回答が全国平均を大きく上回った。学校の全職員で児童をほめる・認める教育を推進してきたことが、児童の自己肯定感の高まりとして表れてきている。
- 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができる」と回答した児童が、全国平均を大きく上回った。教科等の学習や学級活動において、グループ活動や話し合い活動が積極的に取り入れられ、協働的な学びを通じて、深く学ぶことができていると実感している児童が多いと考える。
- 「理科の勉強は、好きですか」、「英語の勉強は、好きですか」の2つの項目については、肯定的な回答がどちらも全国平均を上回った。箱根町では、小学校兼務型の教科担任制を導入していることで、授業の質の向上や多面的な児童理解につながってきた成果が表れてきていると考える。
- 「普段（月～金）、1日当たりのテレビゲーム（携帯式のゲームやスマートフォンを使ったゲームも含む）をする時間」について、「2時間以上」と回答した児童の割合は、全国平均を大きく下回った。また、「携帯電話やスマートフォンでの SNS や動画視聴する時間」についても、「2時間以上」と回答した児童の割合は、全国平均を大きく下回った。テレビゲームや携帯電話等を扱う上でのルールやマナー、1日の有意義な過ごし方等について学校と家庭で連携しながら考えていく必要がある。

【中学生の質問回答より】

- 「学校に行くのは楽しいと思いますか」、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」の項目について肯定的に回答している生徒が多く、どちらも全国平均を上回った。「友達関係に満足している」、「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」と回答した生徒の割合も多いことから、友達や教師との関係などが良好で、他者とのつながりを感じている生徒が多く、一人ひとりの幸福感が高いことが分かる。
- 「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」と回答した生徒の割合は、昨年度同様に全国平均を大きく上回った。これは、自ら課題を見付け、自ら学び、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決していく、という探究の過程を大切にして取り組んでいる成果であると考えられる。
- 「学校の授業時間以外における1日当たりの学習時間」及び「学校が休みの日の1日当たりの学習時間」について、1時間以上勉強している生徒の割合は、どちらも昨年度よりも増加している。しかしながら全国平均を下回っていることから、学習習慣づくりの取組について共有し、定着が図られるように努める必要がある。
- 「1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用したか」について、「週1回以上」と回答した生徒の割合は、全国平均を下回った。ICTを活用して学習指導することは、教師のみならず、生徒に対しても学力向上に高い効果があることが明らかになっていることから、今後、ICT機器の積極的な活用を進めていくことが求められる。